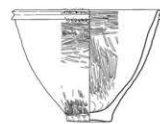


玉沢地区条里跡 11

第 22 次調査

—共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2017

大分市教育委員会

序 文

本報告書は、大分市大字市字堺の坪において平成27年度に共同住宅建設に伴いおこなった玉沢地区条里跡第22次発掘調査の成果を収録したものです。

今回報告いたします第22次調査では、弥生時代前期の遺物が出土する包含層や18世紀後半の道路状遺構などが見つかりました。これらの成果は、弥生時代の集落が周辺部に存在していたことを示唆するものであり、道路状遺構は、熊本から鶴崎へと延びる肥後街道推定路線と一致し、近世における歴史の一端を知ることができるなど、新たな知見を得ることができました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様に触れることができ、郷土の歴史学習に幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました大英産業株式会社ならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成29年3月17日

大分市教育委員会

教育長 三浦 享二

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が玉沢地区条里跡の坪において共同住宅建設に伴い、大英産業株式会社 代表取締役 大関 信からの依頼を受け、平成27年度に調査を実施した玉沢地区条里跡第22次調査地点の成果を記録した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査における遺跡の掘削及び調査記録作成業務については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：堀井泰樹）がおこなった。調査区の航空写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチの依頼を受け、株式会社ふじたがおこなった。
- 3 報告書に掲載した出土遺物の実測及び写真撮影・遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：同上）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けおこなった。
- 4 本書の執筆者は、以下のとおりである。
第1章 小野綾夏（大分市教育委員会文化財課） 第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章 堀井泰樹（有限会社九州文化財リサーチ）
- 5 本書の編集は、大分市教育委員会と有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：同上）の双方の企画の下、有限会社九州文化財リサーチがおこなった。
- 6 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に収蔵・保管している。
- 7 報告書の作成業務については、「大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針」に基づき実施している。

凡 例

- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。 SF：溝状遺構 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系（北緯33°0′、東経131°0′）のX・Y座標を基点として表記している。
- 3 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 4 遺物の法量の内、器高と口径、底径、高台径は以下のとおりに計測している。
器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ 口径：上記の状態で口縁端部外縁の最大径
底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
①遺物断面が黒塗りのもので…須恵器・陶器 ②遺物平面の輪郭と調整の変換点…実線

目 次

第1章 はじめに	1	第2節 歴史的環境	2
第1節 調査経緯	1	第Ⅲ章 調査の成果	3
第2節 調査組織	1	第1節 調査の概要	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2	第2節 主要遺構	3
第1節 地理的環境	2	第Ⅳ章 総括	6

第I章 はじめに

第1節 調査経緯

玉沢地区条里跡は、大分平野の南西部にあたり、大分川支流の七瀬川流域左岸に形成された沖積低地上に所在する埋蔵文化財包蔵地である。これまでに第21次調査までおこなわれており、考古学や文献等の成果を利用し条里制地割成立の解明についてなど植田地区の開発の歴史を報告している。

今回、本遺跡内の大分市大字市字堺の坪において、平成27年5月26日に埋蔵文化財保護法第93条第1項に関する届出と派遣申請書が出された。平成27年6月4日付けで大分県教育委員会から工事前の発掘調査を指示する回答があり、これを受けて文化財課では、平成27年6月10日に遺跡の状況を把握するための確認調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構や遺物が確認され、今回の事業計画である共同住宅建設に伴う建物基礎が遺跡に影響を及ぼすことが判明した。そのため、大英産業株式会社と文化財課との間で開発内容や発掘調査費用について協議をおこなった。協議の末、調査計画等を双方が合意したため、埋蔵文化財発掘調査業務等協定書及び発掘調査委託契約書を平成27年9月1日に締結した。

発掘調査は、平成27年10月14日に着手し、11月27日に埋め戻しが終了し調査が完了した。調査面積は、311.2㎡である。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続きおこない、報告書の作成を平成29年3月17日までおこなった。

第2節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

<平成27年度 調査体制>

大分市教育委員会教育部文化財課

課長 塔鼻 光司

参事 長野 清尊

坪根 伸也

特別顧問 玉永 光洋

歴史資料館館長 武富 雅宣

副館長 安東 俊昭

顧問 讃岐 和夫

埋蔵文化財担当班

参事補(ケルブリーダー) 池邊 千太郎

主査 五十川 雄也(調査担当)

管理庶務担当班

主査(ケルブリーダー) 首藤 敏行

主査 竹中 智美

主任 朝川 貴俊

事務員 永野 雄介

<平成28年度 報告書刊行>

大分市教育委員会教育部文化財課

課長 塔鼻 光司

参事 長野 清尊

坪根 伸也

栗田 博之

特別顧問 玉永 光洋

歴史資料館館長 武富 雅宣

顧問 讃岐 和夫

埋蔵文化財担当班

参事(ケルブリーダー) 池邊 千太郎

主査 五十川 雄也

主事 小野 綾夏(整理担当)

管理庶務担当班

主査(ケルブリーダー) 首藤 敏行

主任 大島 輝

主事 永野 雄介

事務員 中山 美穂

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置している。北側は別府湾に面し、南側は標高約596 mの霊山を中心とした丘陵が東西方向に延び、西側は標高628 mの高崎山がそびえる。別府湾に面する一帯には大分平野が広がり、その東側には由布山系を祖流とする大分川や祖母山系を祖流とする大野川の二つの主要河川が別府湾へと北流する。今回の調査区は、大分平野の南西部、大分川の支流である七瀬川左岸に形成された標高約16.5 mの沖積地上に位置する。この沖積地は、北東側は大分川に、東側から南側を七瀬川と霊山の丘陵、北側から西側を標高67～76 mを最高とする丘陵によって取り囲まれる。



第1図 大分市の位置図

第2節 歴史的環境

調査区周辺の遺跡について、遡ることができるのは縄文時代後期である。玉沢地区条里跡第2次調査では後・晩期の土坑や包含層が(註1)、玉沢地区条里跡第16次調査では晩期の浅鉢埋納遺構が確認されている(註2)。

弥生時代では、標高約67 mの台地上に位置する雄城台遺跡が前期末～終末にかけての集落遺跡で、当地域における拠点集落と考えられている。後期には環濠を有しており、巴形銅器が出土している(註3)。また、竪穴建物跡からは後漢鏡片が2点出土している(註4)。沖積地では、玉沢地区条里跡第2次調査で中期～後期の水田跡・溝状遺構・甕棺墓群が、玉沢地区条里跡第6次調査で中期～後期の水田跡が確認されている。

古墳時代では、玉沢地区条里跡第3次調査で前期中頃～中期初頭(註5)、玉沢地区条里跡第11次調査で前期末～中期初頭の竪穴建物跡が確認されている(註2)。集落を営む主体が台地上から沖積地に移動したものと考えられる。古墳は、玉沢地区条里跡の南西、標高約64 mの丘陵上に全長75 m以上の御陵古墳が築造される。5世紀中頃の前方後円墳であるが、発掘調査後に消滅している。その他、5世紀代の古墳として下ヶ迫古墳や世利門古墳等が位置している。また、高来山横穴墓は、5世紀後半の初源期の横穴墓と考えられている。

古代では沖積地上に一町四方の耕作区画が観察され、玉沢地区条里跡として周知されている。条里地割について、玉沢地区条里跡第9次調査においてその基礎が古代まで遡ることが確認されている。玉沢地区条里跡の周辺は、承平5年(935)の「和名類聚抄」に植田郷と記載されるが、中世以降は植田荘と呼ばれる荘園となる。植田荘は植田氏を開発領主として成立した荘園でその大半を領有していたが、13世紀には豊後国守護である大友氏によって統治されることになる(註6)。

近世になると延岡藩領・臼杵藩領・府内藩領・肥後藩領に分割される。調査区が位置する大字市周辺は、臼杵藩領となり「市村」もしくは「植田市村」と呼ばれる。現在、植田公民館内には「従是西臼杵領」、市公民館内には「従是東臼杵領」と刻まれた境界石が残されている。市村は明治22年に植田村となり、明治40年の隣村との合併により成立した植田村、昭和30年には大分村、昭和32年には大分町との変遷を経て、昭和38年に大分市と合併、さらに平成17年の合併により新しい大分市が発足し現在に至っている(註5)。



第2図 周辺主要道路分布図 (1/50000)

第III章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は大分市大字市字堺の坪に所在しており、玉沢地区条里跡内の西側に位置する。今回の調査区の西側には第11・16次調査区が隣接している。第11次調査区では古墳時代前期末～中期初頭の竪穴建物跡が、第16次調査区では縄文時代晩期の浅鉢埋納遺構及び中世後半の溝状遺構が確認されている。今回の第22次調査は、平成27年10月14日から平成27年11月27日の期間に実施した。面積は約311.2㎡である。調査の結果、溝状遺構1条・道路状遺構が確認された。遺物は、コンテナ5箱分が出土している。第8図に掲載した遺物の種類・器種・法量・胎土などについては、遺物観察表（第1表参照）にて報告している。

第2節 主要遺構

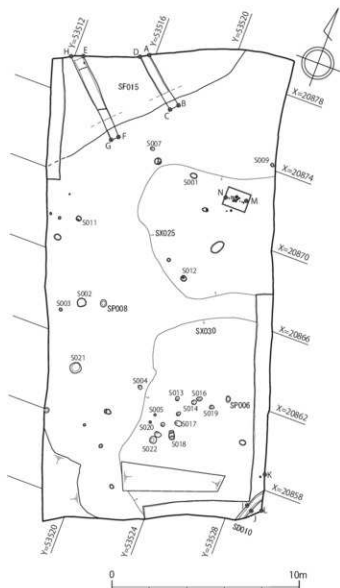
溝状遺構

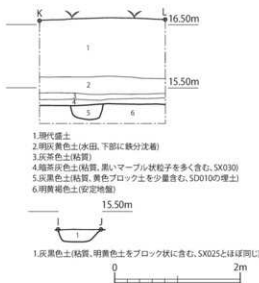
SD010（第5図）

調査区の南東端、SX030除去後に検出された溝状遺構である。南西から北東方向へと直線的に延びており、主軸方向はN-21°-Eをとる。確認した規模は、長さ約2.3m、幅約0.7m、検出面からの深さは約0.2mである。断面は逆台形状を呈する。埋土は灰黒色土の単一層で、水流に伴う鉄分の沈着や粘質層はみられない。弥生土器小片が出土しており、その帰属年代から、弥生時代以降に埋没したものである。



第3図 調査地点位置図 (1/10000)





第5図 SD010 遺構実測図 (1/60)

道路状遺構

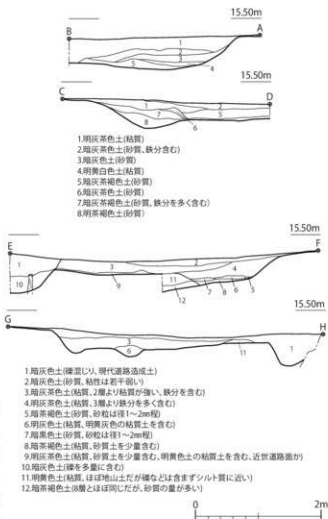
SF015 (第6図)

調査区の北西隅で検出された道路状遺構で、南西から北東方向へと延びる。南側辺のみが確認でき、北側辺は調査区外となるため、その幅は不明である。確認した規模は、長さ 12 m、幅 4.7 m + a で、主軸方向は N - 40° - E である。掘削はトレンチによるものであり、平面的に道路状遺構として確認できていない。土層観察により掘り込み地業および側溝状の凹みが確認できた土層は、EF 間のみである。確認した掘り込み地業の深さは、検出面より約 0.5 m で、路盤として下層より 12 層の暗茶褐色土・11 層の明黄色土・9 層の明灰茶色土を敷き均す。その後、敷き均した 9・11・12 層を掘り込んで、4～8 層の側溝状の凹みが掘削される。その幅は約 1.6 m、深さは約 0.3 m を測る。遺物は 10 層から関西陶器・陶胎染付が出土しており、18 世紀後半と考えられる。

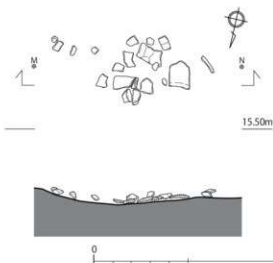
その他

SX025 (第7図)

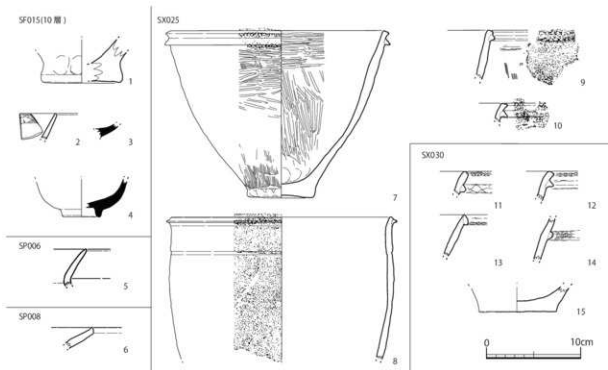
調査区の東側に位置する。その規模は長軸約 7 m、短軸約 6.5 m、検出面からの深さは約 0.05 m と非常に浅い。埋土は灰黒色土の単一層である。弥生土器裏が出土しており、その帰属年代から、弥生時代前期に埋没したものである。同様の遺構として、調査区南側で SX030 が確認された。



第6図 SF015 遺構実測図 (1/60)



第7図 SX025 遺構実測図 (1/20)



第8図 出土物実測図 (1/4)

第1表 土器・陶磁器類観察表

国庫番号	発掘番号	種別	部種	法量(cm)口は復元数値				色調・釉調	胎土	図形・断面		備考	分類時期	R番号
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚	孔径/ 孔数			内面	外面			
第8図1	SF015	弥生土器	甕	-	4.6 ^a	(8.1)	-	(外)淡赤褐色 (内)淡褐色	角閃石、長石、白色 粘土	ナデ	ナデ		弥生	001
第8図2	SF015	甕	甕	-	2.5 ^a	-	-	(外)淡赤褐色 (内)黄褐色	粘土			青磁塗付	18世紀	005
第8図3	SF015	陶器	甕	-	1.4 ^a	-	-	(外・内)黄褐色	粘土			黒面陶器	18世紀	003
第8図4	SF015	陶器	甕	-	4.0 ^a	(4.2)	-	(外・内)黄褐色	粘土			黒面陶器	18世紀	004
第8図5	SP006	土師器	甕	-	3.9 ^a	-	-	(外)淡褐色 (内)褐色	角閃石、長石、石 灰、白色・褐色粘土	ナデ	ナデ	口縁端部に黒点		001
第8図6	SP008	土師器	甕	-	2.2 ^a	-	-	(外)淡褐色 (内)褐色	角閃石、長石、白色 粘土	ナデ	ナデ			001
第8図7	SX025	弥生土器	甕	(23.0)	18.0	7.2	-	(外)淡赤褐色 (内)淡黄褐色	長石、石英、白色粘土	ミガキ	ミガキ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	001
第8図8	SX025	弥生土器	甕	(23.0)	15.0 ^a	-	-	(外)淡赤褐色 (内)淡黄褐色	角閃石、長石、石 灰、白色粘土	ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	002
第8図9	SX025	弥生土器	甕	-	5.2 ^a	-	-	(外)淡黄褐色 (内)淡黄白色	角閃石、長石、石 灰、白色粘土	タテ・ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	004
第8図10	SX025	弥生土器	甕	-	2.0 ^a	-	-	(外)褐色 (内)淡黄褐色	白色粘土、褐色粘土	ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	001
第8図11	SX030	弥生土器	甕	-	2.5 ^a	-	-	(外・内)赤褐色	角閃石、白色粘土、 砂粒	ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	003
第8図12	SX030	弥生土器	甕	-	3.0 ^a	-	-	(外・内)黄褐色	角閃石、褐色粘土、 白色粘土	ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	005
第8図13	SX030	弥生土器	甕	-	4.4 ^a	-	-	(外・内)淡黄褐色	角閃石、白色粘土、 砂粒	ナデ	ナデ	口縁端部に 刻目変形	弥生前期	006
第8図14	SX030	弥生土器	甕	-	4.3 ^a	-	-	(外・内)赤褐色	角閃石、長石、白色 粘土	ナデ	ナデ	刻目変形	弥生前期	004
第8図15	SX030	弥生土器	甕	-	2.7 ^a	(8.2)	-	(外)淡黄褐色 (内)黒褐色	角閃石、長石、白色 粘土	ナデ	ナデ		弥生前期	001

第IV章 総括

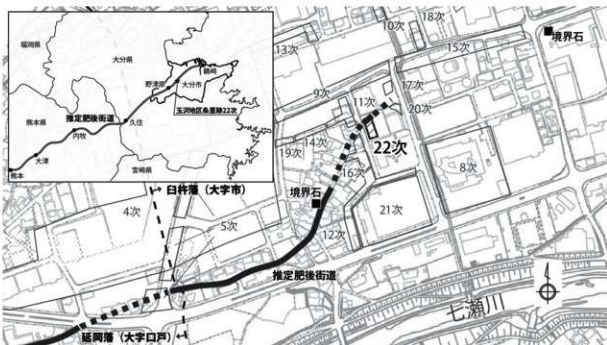
今回の第22次調査では、西側に隣接する第9・11次調査で確認された古墳時代前期末～中期初頭の竪穴建物跡は検出されなかった。これは当調査区周辺が、集落のある高地と耕作地の低地との境付近に位置する地理的要因に起因するものと考えられる。集落については、SX025やSX030より出土した弥生時代前期の甕が、周辺に当該期の集落の存在を示唆するものとも考えられ、さらにその土地利用の開始は第16次調査で確認された浅鉢埋納遺構の時期である縄文時代晩期まで遡る可能性がある。

調査区南東側に位置するSD010は、弥生時代以降に埋没した溝状遺構である。水流に伴う堆積が確認されておらず、区画溝となる可能性がある。しかし、確認できた長さが約2.3mと短く、その性格については今後の周辺で実施される調査結果を踏まえ再検討する必要がある。

調査区北西側に位置するSF015は、18世紀後半の道路状遺構で、区画整理前の市集落内を南西方向から北東方向へと延びる道路とほぼその位置が重なっている。この道路は、大分の鶴崎と熊本を結ぶ肥後街道の推定路線上に位置し、SF015は肥後街道そのものと考えられる。今回の土層観察で確認した路面幅を掘り込み、その内側を嵩上げて路面を形成する工法が「豊後大分型道路」^(註7)であり、大分市内では中世大友府内町跡やその対岸の下部遺跡群を中心として古代～中世の道路状遺構の調査例があげられる。近世の調査例については、府内城域下町跡^(註8)や横尾遺跡等の事例があげられる。臼杵藩領である今回の調査区と、府内藩領である府内城域下町跡のような異なる藩領においても、同一の道路造成工法が確認された意義は大きいと考えられ、その背景の解明が今後の課題の一つといえよう。

引用・参考文献

- 註1 大分市教育委員会 2002 「玉沢地区条里跡第2次発掘調査報告書」 大分市埋蔵文化財調査報告書第35集
 註2 大分市教育委員会 2008 「玉沢地区条里跡第10・11・12・13・14・16・18・19次発掘調査報告書」 大分市埋蔵文化財調査報告書第81集
 註3 大分県教育委員会 1996 「雄城台遺跡（9次調査）」『大分県埋蔵文化財年報4 平成6（1994）年度版』
 註4 大分県教育委員会 1987 「雄城台遺跡—第8次調査の概要—」
 註5 大分市教育委員会 2005 「玉沢地区条里跡第3次調査」 大分市埋蔵文化財調査報告書第59集
 註6 大分県教育委員会 1994 「植田市道跡」 七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 註7 坪根伸也 2011 「時をかける道路—豊後大分型道路の成立と継続性の背景—」 古文化談叢第65集 九州古文化研究会
 註8 大分市教育委員会 2015 「大友府内21 中世大友府内町跡第108次調査」 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第137集



第9図 第22次調査SF015・推定肥後街道位置図



調査区透景（西から）



調査区全景（右が北）



完掘状況 (北から)



SD010 完掘状況 (北から)



SD010 土層断面 (南西から)



SF015 トレンチ掘削状況 (東から)



SF015 AB 間土層断面 (西から)



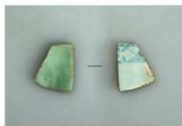
SF015 EF 間土層断面 (西から)



SX025 遺物出土状況 (東から)



調査区西壁土層断面 (東から)



第8図 - 2



第8図 - 7



第8図 - 8

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たまさわちくじょうりあと							
書 名	玉沢地区条里跡 11							
副 書 名	第 22 次調査 ー共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー							
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第 149 集							
編 著 者 名	小野綾夏 堀井泰樹（有限会社九州文化財リサーチ）							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒 870-8504 大分市荷揚町 2 番 31 号 TEL (097) 534-6111 FAX (097) 536-0435							
発 行 年 月 日	西暦 2017 年 3 月 17 日							
ふりがな	ふ り が な	こ ー ど		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村	道庁番号					
たまさわちくじょうりあと	おおいたしおおあざいち	44201	201111	33° 11' 13"	131° 34' 26"	20150104～ 20151127	311.2	民間開発
玉沢地区条里跡	大分市大字市							

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
玉沢地区条里跡 第22次	条里	弥生時代・近世	弥生前期の遺物包含層 近世の道路状遺構	弥生土器・近世陶器	肥後街道の一部と見られる道路状遺構

要 約	調査地点は、大分平野の南西部にあたり、北側には雄略台をはじめとする標高50～80mの低丘陵が位置し、南側には標高596mの霊山を望むことができる。玉沢地区条里跡は、市内を流れる大分川支流の七瀬川流域左岸に形成された標高12～18mの沖積低地上に位置する道路で、これまでに21地点で発掘調査が実施されている。 調査の結果、調査区全域で弥生時代の遺物包含層が検出できた。遺物は、遺構検出面直上で弥生時代前期に帰属する甕がほぼ完形の状態2個体出土しているが、遺構としての掘り込みは確認できなかった。生活空間に伴う遺構の検出はなかったが、遺物の出土状況から周辺では同時期の集落の存在が考えられる。また、調査区北側で18世紀後半の道路状遺構を検出した。肥後街道の一部と想定される。
-----	---

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第149集

玉沢地区条里跡 11

第22次調査

ー共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

2017年3月17日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2-31

